

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成30年8月号

平成三十年八月一日発行 第二十八巻第七号  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可  
通巻第三二五号 (毎月一回一日発行)

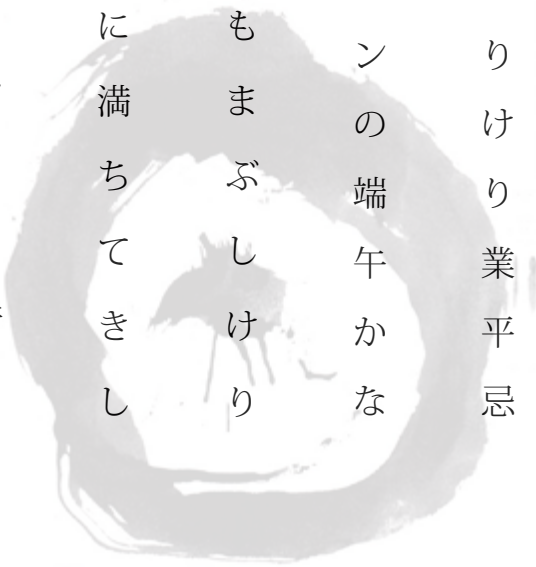


# 若葉風

高橋将夫

ロボットにさせる戦や晶子の忌  
万緑や傷つきやすきオゾン層  
蟻の穴個人情報漏れやすし  
もう使ふことなき水着他あまた

若葉風窪み茂みと吹きにけり  
ハンカチとセットで熊野化粧筆  
報はれぬこともありけり業平忌  
桃太郎よりポケモンの端午かな  
新緑も孫の寝顔もまぶしけり  
青葉潮古希の心に満ちてきし  
この泉我を映さぬほど清ら



# 槐賞受賞作品二十句

藤田美耶子

飛梅の言霊まとひ光りをり  
会ひたいと言ふ人のある暖かさ  
大風の風と呼吸を合はせけり  
春霞記憶の壺のふたを閉づ  
流木のやがて芽吹けり新天地  
薫風や画布に一と刷け光のす  
薔薇の園王妃のごとく顔上げて  
青年の瞳に白帆夏兆す  
ぬぐはれて黴より出でし四神の竜  
天界の川にも揚げよ大花火

大花野に流るる生と死のロンド  
水澄みて心の綾の映りけり  
嘘と真見て見ぬふりや台風の目  
糸とんぼ風に姿をかくしけり  
水海月踊り続けるバレリーナ  
永遠の帳を破り流れ星  
月天心自分の影とワルツかな  
五線譜の音符はらりと風花す  
散り敷いて落葉思索の道となる  
人の世の祈り重たし冬北斗

# 槐安集

水野恒彦

玫瑰や波は光を抱え去る  
過去といふ絶対のもの大昼寝  
地に落ちてでで虫神を疑へる  
滝の面（も）をわが魂駈け上がる  
襷しむぎとたましひたまひ闊あひらぐ大牡丹

加藤みき

竹藪の大きなうねり梅雨時間  
優曇華に聞こえてゐたる風の音  
白緋背が高すぎてなほ未だし  
柿若葉閑かなときを賜りて  
いつ来ても仰ぎてゐたる朴の花

中島陽華

いとけなや八女の楽士のミニトマト  
蘭鑄の夜の臍となりにつけり  
永らへて鮎の骨抜く貴船かな  
天網恢恢鯉に珍子ありにけり  
垂乳根の峽の大門の初音かな

竹内悦子

油壺の蓋開いてをる薄暑かな  
大皿は寒山拾得餃子焼く  
サンガラス荒武者に席譲られし  
夏至熊野省二の魂に呼ばれけり  
舌出して烏柄杓の理論かな



雨村敏子

柿若葉あさの日のいろ水のいろ  
諸葛菜天竺木綿の袖通す  
累累と蟻の一系列山寺へ  
晩節の真只中やバナナ食ぶ  
南無南無と色紙に書けり梨月夜

本多俊子

日輪は金横たふは寝釈迦かな  
岩鏡妣の唇紅のいろ  
翳だけが膝に遊べり黒揚羽  
人の世は不可解でよし滝の面  
桃活けて静かなる夜をふくらます

近藤喜子

感じ易き心の色よ柿若葉  
森しんと古代に続く新樹かな  
ででむしや道をつけねば進めざる  
墨すつて髪かたくなる夏書かな  
翅を曳く喪服の蟻の長き列

瀬川公馨

強烈なアカシアの花の大罨  
索条痕浮みてゐたり玄鳥至  
天狗の庭リバタリアンの黄蝶かな  
伸るか反るか飛行機雲と夏の空  
莫塵の上に置かれてゐたるライラック

久保東海司

夏星を見てゐる麦の背丈かな  
道順は A I 頼み金魚売  
血が沸る朱夏のネアンデルタル人  
雷鳥の牛耳る雲の中の空  
あんみつや平成余年の日曜日

柳川 晋

草餅は人の不幸にやさしかり  
苗代の水から曇る山河かな  
うららかや眠くなるほど羊ゐて  
笑はせてはじまる法話余花の雨  
なめくぢは謎の艶文残しをり

熊川暁子

梔子の白の残像まなうらに  
茅花ながし己を探す影ひとつ  
牡丹の崩るる音と思ふかな  
日の端にけふはここまでかたつむり  
咲ききりしバラの翳りを見し夕べ

寺田すず江

渦潮の渦の真ん中動かざる  
螢烏賊食して肋の発光す  
こんな画に出会へるなんて夏館  
バス停に現はれ出でし今年竹  
吉日の葉桜の下日の斑

岩下芳子

初夏や木洩れ日といふ愛の中  
宇宙から見れば地球はつねに初夏  
竹の皮脱ぐとききつと痒がりぬ  
どくだみは晴れてゐる日も濡れてゐる  
桃園をすこし美人となり出でぬ

近藤紀子

夏蝶の影ゆらゆらと夢想かな  
聖五月風にこころを癒さるる  
玉虫や神より賜りし光  
柿若葉過去美しく塗り替へる  
散策やこころ緑に染まるまで

岩月優美子

子雀の聲に目覚むるよき日なり  
リハビリの窓にはりつく雨蛙  
薫風の赤子の聲をはこび来る  
補陀落へ流るる途中花筏  
居心地のよろしき暗さ青葉闇

竹中一花

山裾ちゆを祭りの牛車川光る  
丸に、や槐の花の咲き初むる  
大鼓おほかほの音に太るや杜若  
夕立や呪文唱へる増女  
諸葛菜二日酔なる目を覚ます



前田美恵子

春眠の猫の齢を見せざりし  
万緑やぼつねんとある喫茶店  
狛犬の立ち上がるかに夏きざす  
火事跡と思へぬ気負ひ柿若葉  
朝蜘蛛の逃げ足速き古畳

中田禎子

住吉や檮の花に海の風  
開きたる朱の玉手箱青葉潮  
青嵐水音の奥に丸太小屋  
圓窓の悟り四角に墓  
マザーグース開く八十八夜かな

吉田順子

一湾のひかりの真中五月の帆  
道なきを来て小判草鳴りにけり  
おだやかに齡加わる沙羅の花  
神木や大瑠璃の声天に透く  
大夕焼浜尽くるまで歩みけり



# 槐市集

古賀恵子

白南風や赤き靴紐きつく締め  
聖五月息整へし初舞台  
大空や万緑写す池の面  
乱舞する蛩一匹群離る  
青葉若葉村の若者団結す

阪倉孝子

卯波立つわたつみの声寄せ来たる  
花は葉に宴あとなる風浄土  
幸せの目方は新茶一〇〇グラム  
天界の声なき便り落し文  
後ろより口笛の呼ぶ青野行く

柴田靖子

葎生や時とまりたる家のあり  
寄せ引く波追へばすぎし日走馬灯  
きはめれば至福来たるや薔薇満開  
紫陽花につつまれ妣の温もりを  
茄子の花明日の希望をのぞきみる

庄司久美子

王仁の墓の朱き柱やはしり梅雨  
八方に広がる山の気著莪の花  
三ツ編みの少女の髪や夏はじめ  
新緑や紫雲たなびく生駒山  
円錐の豎穴の家山若葉



杉原ツタ子

かけ違ふボタンの穴や夏来る  
業平の都忘れや風のこゑ  
桐咲いて妖精たちのざわめきよ  
あいの風竜飛岬の潮かな  
風光る浄土ヶ浜の波頭

高野昌代

清姫の衣一重は蛇の皮  
夏の夜の見せ場多うてあのオペラ  
暮れかぬる時の鐘撞く初燕  
夕風や画布に残しし由岐の浜  
リラ冷ゆマネの筆なる肖像画

竹村 淳

石垣のゆるやかにして山葵漬  
磯笛の波と挙るや春の海  
風聴きつ藺草の匂ふ座敷かな  
名優の面影偲ぶ春の雨  
青葉梟遠く近くに闇に聴く

田中信行

溪谷の緑を浴びて涼新た  
揚雲雀空の青さを指南せり  
海臨む白壁の路地初燕  
お茶菓子にクツキー一つ風薫る  
お返しに新茶選びて書く手紙

田中美恵子

片蔭に赤子あやすや風生るる  
言祝ぐや破顔一笑紅の花  
心臓をめがけ一氣に滝落つる  
川底に光届きし鮎の川  
木のドーム出雲にありて青葉木菟

時 澤 藍

麦の禾浮き上がりたる日差しかな  
背もたれにしぼしの眠り木の芽風  
五月風遊び始めしおくれ髪  
今生に悔い残すまい花柘榴  
万緑をくぐりてきたる風の味

# 槐集

## 高橋将夫選

蝸牛どこかあなたに似てをりぬ  
大阪 江島 照美

大切な金魚の糞の弟よ  
竹婦人抱いて命の存へり

回文のごとき人生ハンモック  
振り花信じるといふ逃げのあり

風死すや珊瑚に突きさす星条旗  
竜天に翁旅立つ細き道  
平野 多聞

かぐや姫と朧月夜の糸電話  
濁流を飲み込む古民家燕の巢

SLの菜の花色と化す湖国  
生きてこそそんな風吹く五月です  
竹原 久保 夢女

初夏の海のキラキラ浴びに行く  
薔薇咲けば愛の妙薬万金丹

一筋の風ふうりんを試したり  
老鶯もそこから先は知らざりし

羅漢どち五百の思ひ滴りぬ  
枚方 阪倉 孝子

葉桜や悠悠の時紡ぎける  
くれなゐの想ひありけり白牡丹

藤房は風になるまで揺れてをり  
螢袋ことだま宿り灯しける

亀鳴けどそこにある危機気がつかず  
新樹光モーツアルトのα波  
大阪 藤田美耶子

そら豆や福耳そろふ目出度さよ  
天界に散華のごとく花辛夷

チューリップワルツに乗って顔出せり  
我が物と見下ろす此の世五月鯉  
守口 三木 亨

振花の穿つ夜空に闇の屑  
鯉幟かつての正義はためかせ

輝きは初な若葉の照れ隠し  
なに事もなきかの様に葉桜す

# 銀河往來

## ◆槐集觀照

振り花信じるといふ逃げのあり 江島 照美  
来世があると信じれば死も恐くない。信じてしまえば迷わずにすむ。しかし、これはどうも「逃げ」ではないかと思える時も確かにある。「振り花」ではないが、少し捻れば別の面が見えてくるものだ。

「蝸牛どこかあなたに似てをりぬ」の句、どこが蝸牛に似ているのであろうか。想像するのが楽しい一句。

「大切な金魚の糞の弟よ」の句、金魚の糞のようにいつも付きまとつていた弟への愛がこもっている。

「回文のごとき人生ハンモック」はハンモックに揺られての感懐。「竹婦人抱いて命の存へり」はまさに命の賛歌。

「信じる」や「人生」や「命」などの観念の世界を身を引き付けておおらかに詠んでいる。

辺野古

風死すや珊瑚に突きさす星条旗 平野 多聞  
「珊瑚に突きさす星条旗」が沖繩の基地問題を見事に象徴している。

「竜天に翁旅立つ細き道」は、「竜天に」と「翁旅立つ細き道」の対比に注目。「かぐや姫と朧月夜の糸電話」は現代のおとぎ話。「濁流を飲み込む古民家燕の巣」の句では濁流が古民家を飲み込むのではなく、古民家が濁流を飲み込んでいる点に注目。

一筋の風ふうりんを試したり 久保 夢女  
風に揺れる風鈴を見て、風が風鈴の音を試していると想像できる人がどれだけいるだろうか。この作者ならではの感性。  
「老鶯もそこから先は知らざりし」、確かに人生その先は誰も知らない。「薔薇咲けば愛の妙薬万金丹」はまさに俳諧。

藤房は風になるまで揺れてをり 阪倉 孝子  
風に揺れる藤の花が実に巧みに詠まれてゐる。

「くれなゐの想ひありけり白牡丹」、葉桜や悠悠の時紡ぎける、「羅漢どち五百の思ひ滴りぬ」、「螢袋ことだま宿り灯しける」、どの句も作者ならではの視点で、作者ならではの思いが表現されている。

亀鳴けどそこにある危機気がつかず 藤田美耶子  
誰も危機に気付かない。「亀鳴く」の季語が不思議な世界を展開する。

輝きは初な若葉の照れ隠し 三木 亨  
若葉の輝きはうぶな若葉の照れ隠しだという。これこそ、この作者ならではの感性。

緑陰の人引き寄するベンチかな 時澤 藍  
緑陰を歩いていてベンチを見るとなんとなく坐ってみたくなる。空いているベンチは人を待っているのだろうか。

「改良種紫陽花色を忘れけり」の句、これだけ品種改良が進むと、いつかどれが本来の花の色かわからなくなりそう。(以下略)

迫る一句。

〔竜天にコップの水の震へけり〕の句、竜が天に上る大景をコップの水のかすかな動きに結びつけたのが手柄。

〔海に出て飛花天竺の風に乗る〕はその自由奔放さが魅力。

遙かより祈るほかなし星隴 大塚李里子

震災の際など、救助にかけつけたくともできずに、ただ無事を祈るしかない。まこと、「祈るほかなし」ということが多いのが世の中。

シャボン玉のりて宇宙へ旅の夢 柴田 靖子

次の「連れ舞ひて青き空ゆく春颯」の句と共に、春天がおおらかに詠まれていて心が和む。

さくらさくら余生を飾る並木道 中 貞子  
余生を飾る桜の並木道。その精神の位相に共鳴する。

壺に納まる花大根の天地かな 井上 静子  
大根の花咲く大地と空。壺の大根の花にはそれらが無い。壺だけがこの大根の花にとつての大地なのだ。住めば都か。

春闌ける短か過ぎたる導火線 中西 厚子  
過ぎゆく春を惜しんでいる。惜しむというより残念がついているのだろう。導火線が短かすぎたと悔いが残る。一体何があつたかは読者の想像に任せられている。

花筏一寸法師漕ぎ分けて 竹村 淳

花筏と一寸法師のメルヘンの世界。

裸電球の蔵の美人画幣辛夷 庄司久美子

裸電球のもとでの美人画。場所は蔵。なんとも心にくい景で、思わず採らされる一句。幣辛夷もいい。

〔また固き金色堂の路の暮〕は素直で好感のもてる一句。

植木屋の運んで来たる初夏の風 中島 昌子

爽やかな初夏の風の中を植木屋がやってきた。「植木屋」が実によく効いている。

〔万愚節魔女の一撃くらふ魔女〕は発想がユニーク。

春風や湘南あまねく恋うづく 高野 昌代

湘南へは行ったことないが、確かにそんなイメージがあると  
思う。春風と春の波と青春と恋。

〔春惜しむアナログ時計は時惜しむ〕はアナログ時計の長針の動きが目に見えてくる。

弥次郎兵衛花風に酔ひ踊りける 阪倉 孝子

弥次郎兵衛が風にゆれている。花見の酒に酔って踊っているという見立てがユーモラスで楽しい。

〔籠夜やひらがなのごと眠りける〕の「平仮名のような眠り」の比喻もうまい。

宇宙は愛愛は宇宙へ花万朵 岩田 洋子

愛の大きさがよく伝わってくる。花万朵がめでたい。

〔春の闇匂ひの迷路に迷ひ込む〕の句、闇で何も見えないから匂いが頼りなのに、それがまた迷わせるという。春の闇の本質に迫る。